

学校の福祉教育で活躍している 障害当事者に聴く！

福祉教育
ってなに？

自分や自分以外のすべての人々がお互いに大切にされ、そして幸せになるための「福祉」。児童生徒が「福祉」について他人事ではなく自分自身の問題としてとらえ、考え・行動するきっかけをもたらすのが「福祉教育」です。港南区社協では福祉と教育を結ぶ大切な場として学校での福祉教育に力を入れています。福祉教育の場でいつも活躍をしている港南区在住の3人の方へインタビューしました。

車いすバスケットが拓いた世界

平井 晃さん

家の庭木剪定中、転落して脊髄を損傷し両下肢麻痺になり、20代で車いす生活となった平井さん。事故当初は家に引きこもり、なかなか外に出る気になれませんでした。そのころ友人から勧められて始めた車いすバスケットに段々と熱中するようになり、精神的にも前向きになってきたそうです。



「車いすだから」より「車いすだからこそ」

学校では車いすの生活や街づくりなどの講話と、車いすバスケットのデモンストレーションの後、実際に生徒と試合形式の体験をしています。授業を通して、『障害者は「病人」「かわいそう』』という当初のイメージから、「力になりたい、助けたい、自分も頑張りたい」と生徒の気持ちが変わり、感想をもらおうと、「やって良かった、またやらなくてはと思います」と平井さん。

手話は言語のひとつです

田辺 悦也さん

生まれつき聴覚に障害がある田辺さん。ろう学校は少なく、片道2時間の道のりを母親と通っていました。ろう学校で手話は禁止されており、手話が一つの言語として認められるようになったのは、最近のことです。聴覚障害者のために尽力し、現在は健常者とともにボランティア活動に励んでいます。



「出会った生徒が手話であいさつ」

学校では「聞こえないってどんなこと？」をテーマに、外見だけではわからない障害、日常生活の様子、コミュニケーション方法や簡単な手話指導等を、田辺さんと手話サークルのメンバーとで説明しています。子どもが分かってくれた、街で出会った時に生徒が覚えた手話であいさつしてくれた、授業の後で手紙や絵をくれた、それが「うれしい」と田辺さんは語ります。

人から受ける幸せから 人に与える幸せに

笠羽 明美さん

子どもを出産した直後に目の異常に気付き「網膜色素変性症」と診断され、視力0.1から徐々に弱視、全盲になっていきました。見えているつもりで歩いていて、電信柱にぶつかりコブをつくったり、挨拶されても気づかずに通り過ぎてしまい、誤解されたりすることも。からだの痛みと共に心も痛み、つらかったそうです。

「白杖をつく勇気もたらしたもの」

見えないことを受け入れるまでは時間もかかりましたが、白杖（視覚障害者用の杖）を自ら使おうと決めてからは点字、カナタイプなど生活に必要な技術を必死に学びました。今では趣味の盲人卓球で国体金メダルを獲得したり、社交ダンスでは、全国大会でワルツ・タンゴなどで優勝をおさめています。また、家族3人で落語を演じており、自称「ピンポンやって社交ダンスを踊れる落語家」。精力的な笠羽さんです。

福祉教育では音声パソコン、音の出るボールを使った、盲人卓球を生徒とともに体験し、生活の様子を知ってもらっています。「当初は、「人から受ける幸せ」の毎日でしたが、私にできる活動で「人に与える幸せ」へとノーマライゼーションの担い手として少しでも人の役にたてる人生を歩んでいきたいと思っています。」

※ノーマライゼーション＝障害者と健常者とが区別されることなく、社会生活を共にするのが本来の望ましい姿であるとする考え方。



『木曜手話の会』では一緒に活動していただける「メンバー」を募集中！

ご興味のある方は、お気軽に区社協までお問い合わせください。